



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アルフレッド・マーシャルの共感の概念：マーシャル経済学における教育の役割との関連をめぐって
Author(s)	松山, 直樹
Citation	経済學研究, 59(2), 57-80
Issue Date	2009-09-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39322
Type	departmental bulletin paper
File Information	59-2_005.pdf



アルフレッド・マーシャルの共感の概念

——マーシャル経済学における教育の役割との関連をめぐって——

松 山 直 樹

1. はじめに

本稿の目的は、アルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall, 1842-1924) が経済学の研究に従事する以前から一貫して共感の概念を用いていたこと、さらにその概念がマーシャル経済学において教育の役割と密接に関係づけられていることを明らかにすることにある。

マーシャル経済学は、一つの財市場における財価格と需給量の関係を分析する部分均衡理論として知られている。ところが、マーシャルは「需要と供給の平衡ないし均衡は、経済学のより進んだ段階では、…生物学的な色調を帯びるようになる」(Marshall 1898, p.43)と述べており、「静学的均衡理論は経済研究の序論にすぎない」(Marshall 1961, p.461 訳[三]196頁)と考えていた。彼の経済分析の主眼は、静学的な均衡理論にあったのではなく、静学では扱えない経済の動きを生物学的に分析することにあったのである。

マーシャルの経済成長理論——人間と経済の相関的進歩の分析、いわゆる有機的成長論——を理解することへのアプローチは二つの方向性を有していると考えられる。一つは、経済進歩に内在する法則それ自体を探求する方向性であり、もう一つは、経済進歩に内在する法則を生み出している人間行動の原動力となっているものを探求する方向性である。本稿は後者の立場に立っている。したがって、本稿ではマーシャルの考える共感の概念や教育といった人間本性に関する考察を踏まえて、経済・社会の進歩に

ついて論じる必要性があると考ええる。例えば、近藤(1990)は、労働者階級に対する教育が、彼らの潜在能力を引き出し、日常生活の改善だけでなく産業上の能率を高め、人間や社会の有機的成長を促進するとマーシャルが考えていたことを明らかにしている。磯川(1988)は、マーシャルの経済成長理論がスペンサーの適者生存の法則に基礎付けられることを明らかにした。スペンサーの体系において、進化過程のなかで生存することのできる適者は、自己利益を十分に主張すると同時に、他人の利益を考慮して行動をする人間であるという。このようにして磯川(1988)は、スペンサーの指摘する適者が、マーシャル経済学の場合には自己犠牲を行う人間として表現されていると述べる。それでは、マーシャル体系において、教育のもたらす効果や自己犠牲は人間本性の何にもとづいて生じ、行われるのだろうか。この点を明らかにするためには、マーシャルの心理学研究を精査する必要がある。

マーシャルは、1867年にグロート・クラブ——ケンブリッジの討論サークル——に加入することを認められ、翌1868年にかけて心理学研究に熱心に取り組んでいる。彼にとって心理学研究は、人間の能力が発達する可能性を探求する魅惑的な研究であったのである(Keynes [1933]1972, p.171 訳134頁)。ところが、当時、都市部において貧困問題が顕在化しつつあり、マーシャルは心理学研究の限界に直面する。彼は、心理学研究において「社会の現存状態を正当化することが容易ではないと考えるように

なった」(ibid., p.171 訳 133 頁)ことから、経済学を研究する道へ進むのである。それから数十年間、彼は経済学の理論研究を本格的に行っている。ところが、Cook (2006b)は、マーシャルの教育に関する萌芽的なアイデアが、彼の心理学研究——第三心理学研究論文「機械論(Ye Machine)」——のなかに見出すことができることを明らかにした。すなわち、「マーシャルの教育と政治経済学を媒介的に関連付けているものは、かつて『機械論』において描かれた精神モデルであった」(Cook 2006b, p.525)という。このように、マーシャルの心理学研究と経済学は連続的なものとして解釈できる。さらに本稿では、その連続性を根拠づける鍵概念が、マーシャルの共感の概念にあると考える。しかしながら、現在のところ、マーシャルの共感の概念を中心に彼の経済学を読み解こうとする研究はない。彼の共感の概念を示唆するにとどまっている。

例えば、Raffaelli (1994)は、マーシャルが心理学研究において共感の概念を用いていたことを明らかにしており、彼の共感の概念がスコットランド啓蒙哲学者やミルを経て伝わったと指摘している。また、マーシャルの共感の概念は「進化によって強化され、利己性 (selfishness)

と利他主義 (altruism) の隔たりを克服するものである」(Raffaelli 1994, p.84)と述べている。また、Groenewegen (2007)は、マーシャルが心理学研究の段階で、アダム・スミスの『道徳感情論』を所持していた可能性を指摘している¹⁾。周知の通り、スミスの『道徳感情論』は、行為の道徳的な判断や基準について分析がなされた著作であり、特に「共感」がそれらの役割を担っているとされている。ところが、「『産業と商業』における共感への言及は、『道徳感情論』に関する初期のマーシャルの研究に負っているかもしれないが、このことは、はっきりと確認することができない」(Groenewegen 2007, p.285)というのである。このように従来の研究において、マーシャルの共感の概念の内実は具体的に検討されていないのである。したがって、本稿ではマーシャルの共感の概念に関する詳細な考察を行い、初期心理学研究との関係においてマーシャル経済学の教育の役割について論じる。さらに、マーシャルの共感の概念と教育の役割に関する議論が、彼の経済成長理論において重要な役割をはたす人間本性の陶冶に関する議論を敷衍することを明らかにする。このようにして初めて、マーシャルの経済成長理論の根本原理を明確に理解できるようになると考える。

1) Groenewegen (2007, p.274)によれば、「彼[マーシャル]は、1861年付けのスミスの『道徳感情論』の Bohn Standard Library 版を用いていた」という。同論文の調査によれば、マーシャルの所有していたスミスの著作は以下の通りである。

『道徳感情論』

Theory of Moral Sentiments. 1861.

『国富論』

Wealth of Nations. 1st edition. 1776. two volumes.

Wealth of Nations. 1829. with questions by Malthus.

Wealth of Nations. 1860s. with annotations by Cliffe Leslie.

Wealth of Nations. 5th edition (McCulloch's

edition). 1861.

Wealth of Nations. 5th edition (McCulloch's edition). 1863.

Wealth of Nations. 1884. edited by J.S. Nicholson.

Wealth of Nations. 6th edition. 1921. with introduction by W.R.Scott.

『法学講義』

Lectures in Glasgow reported by a student. Cannan edition. 1906.

尚、些細な点だが、マーシャルは『原理』(第8版)において、スミスの『法学講義』を *the Lecture of Adam Smith* と表記しているが (Marshall 1920, 758 n), Guillebaud 版の『原理』(第9版)では *the Letters of Adam Smith* となっており、誤植である (Marshall 1961, p.758 n)。

したがって、本稿は、このような問題意識にもとづき、以下の構成を取っている。第2節では、マーシャルの四編の心理学研究論文を概観する。そして、第三心理学研究論文「機械論」で展開される共感のメカニズムを明らかにする。第3節では、心理学研究においてマーシャルが評価しているハーバート・スペンサーの共感の概念について考察する。さらに、スペンサーが共感の概念を教育との関係で論じていたことを明らかにする。第4節では、マーシャル経済学における共感の概念と教育の役割との関係を、労働者階級とビジネスマンに分けて論じる。最後に、第5節において全体のまとめを行い、教育の役割との関係からマーシャル経済学における共感の概念の位置づけを明らかにする。

2. マーシャルの心理学研究における共感の概念

本節では、マーシャルの四編の心理学研究論文について概観し、第一論文から第三論文への連続性を指摘する。その後、マーシャルの第三論文「機械論」において扱われる共感の原理を詳細に検討する。

(1) マーシャルの心理学研究論文

マーシャルは、1867年から68年にかけて四編の心理学研究論文を発表している。第一論文「節約の原則(The Law of Parsimony)」では、マーシャルが「この論文の主要な目的は、方法におけるこの[精神現象と物理現象の]差異に注意を喚起することである」(Marshall 1867a, p. 99, []内は引用者による,以下も同様)と述べているように、節約の原則の使用に関する比較や検討がおこなわれている。第二論文「フェリエの第一命題(Ferrier's Proposition One)」では、「知性が知っているあらゆることに従ったとしても、知性はその認識の基礎や条件のように、それ自身に関するいくつかの認識範囲をもたねばならない」(Marshall 1867b, p.105)というフェリエの第一命題を参考にして、機械論的なアナ

ロジーが自意識を説明しえないことを主張する。第三論文「機械論」では、人間の精神現象を解明するために、機械的人間(Machine)が想定される。マーシャルは機械的人間の精神現象を科学的に分析するために、連合主義心理学の説明原理を用いる。そして、機械的人間を単純モデル(脳-身体)と複雑モデル(大脳-小脳-身体)に分けて考察するのである。最終的に、自己犠牲という道徳的行為に関する分析が展開される。最後の第四論文「形而上学者や实际的な科学者に対する論理学者ないし学説の作り手の責務(The Duty of Logician or the System-maker to the Metaphysician and to the Practical Man of Science)」では、非ユークリッド幾何学における命題や公理に関する論争が扱われている。しかしながら、以前の三編の論文と比較して、人間の能力を追究する心理学研究の側面を見出すことができないため、第四論文は本稿の考察の対象から除外する。次の項では、「節約の原則」、「フェリエの第一命題」、そして「機械論」がどのように関連しているのかについて考察する。

(2) 「節約の原則」から「機械論」へ

第一論文「節約の原則」において、マーシャルはW.ハミルトン卿の『議論(Discussions)』のなかで用いられたアリストテレスの一般原則を参考にして²⁾、必要以上に説明原理を増やしてはならないという方法論の原則——すなわち、「オッカムの剃刀」あるいは「節約の原則」——に注目するのである³⁾。マーシャルは、人間の精神現象を解明する際に「節約の原則」の重要性を指摘しており、その適用例をダーウィンの『種

2) 門脇(2007,501頁)は、マーシャルの引用したW.ハミルトン卿の『議論』におけるアリストテレスの一般原則(ギリシャ語)を次のように訳している。「原理は多数存在しない」、「少数の言葉によってなされるものは、多数の言葉によって無益にされる」、「自然は不必要を恐れる」。詳細はMarshall(1867a, p.96)を参照されたい。

の起源』に見出すのである。ところが、物理的現象と異なり、人間の精神現象は同質的なものではない。このことから、形而上学の領域へ「節約の原則」を適用している点において、ダーウィンは過ちを犯しているとマーシャルは考えたのである。そこで、マーシャルは、精神現象の根本を探究するにあたってスペンサーの議論に注目するのである。すなわち、

私は、共感の物理的側面と精神的側面が、他の精神現象の物理的側面と精神的側面のそれぞれを生み出しているという関係の概念を形成するにあたり、そのようなスペンサーの試みが、かなりの程度われわれを助けていると考えている。

(Marshall 1867a, p.99)

- 3) 稲垣(1990, 72頁)は、「オッカムの剃刀」を形而上学の原理として解釈すべきか、あるいは、方法論の原則として解釈すべきか、という問題があると述べる。一般的に、前者はオッカムに対して批判的な論者によるものであり、後者はオッカムの哲学を積極的に評価する論者によってなされる解釈であるという。尚、「オッカムの剃刀」という名称は、ハミルトン卿が『哲学、文学、教育、大学改革論集』(マーシャルの参照した『議論』と同様の著作)において初めて用いたとされている(稲垣1990, 76頁)。ハミルトン卿自身は次のように述べている。「細事に説き及ぶことがなければ、一般に、この学説を形成しているひとつの特別な原理に関する想定に対して優先すべき哲学の仮定が存在することは明らかである。これは節約の原理(the law of parsimony)というものであり、それは、ある証明された因果関係なしに、既知の重要性がその[独自の確信を排除するような]現象を説明しようところの未知の力に関する前提である、存在(entities)、力(powers)、原理(principles)あるいは根拠(causes)、これらすべてを増やすことを禁じている。それゆえ、より少ない種類で原因を示している判断について説明できないことが証明される限り、われわれは共通する原則や敵対的な原理からそれを導いていることから、この因果律の学説に対して『オッカムの剃刀(Occam's razor)』をその名称に適用する」(Hamilton[1852]2001, p.590)。

さらに、「私[マーシャル]は、それ[精神現象]に対するスペンサーの指摘」を今のところ決定的に価値のあるものと見なしている」(Marshall 1867a, p.99)と述べており、マーシャルは、種々の精神現象が共感から生じているとするスペンサーの議論を高く評価したのである。このことから、マーシャルの共感の概念はスペンサーの議論から影響を受けていると考えられる。

マーシャルはまた、マンセルの学説を批判するJ.S.ミルの議論にも興味を抱いていた。マーシャルは、マンセルの『バンプトン講義(Bampton Lectures)』⁴⁾をきっかけにして「人間自身のもつ可能性を研究することこそが、人間にとって最も重要な主題なのだと考えるようになった」(Keynes[1933]1972, p.171 訳134頁)と述べている。このように、マンセルに対する彼の関心は非常に高かったと考えられる。また、早坂(1971, 147頁)が指摘しているように、ミルと

- 4) Groenewegen (1995, p.115)は、マンセルの『バンプトン講義』の内容を以下のようにまとめている。第1講義では、不可知について理解するため人間の意識の限界を展開する。第2講義では、ヘーゲルやフォイエルバッハ、シュトラウスへ強い攻撃を与えた絶対の本質が哲学的問題と関連していることを説いている。第3講義では、人間の意識に関する哲学や法則の間の関連を説いている。もっとも重要とされる第4講義では、内省的で直観的な宗教的意識は神の力や道徳の立案者の信念を暗に意味しているので、そのような宗教的直観の基本様式としての依存や道徳的責任に特別に関係する内省的で直観的な宗教意識の分析がマンセルによって神の善性と同一であるとみなされたとグローネヴェーゲン是指摘する。続く第5講義は、思弁的な真実と規制的な真実を区別することを目的としている。さらに、第6講義では、以前の議論の基礎となる宗教的概念の性質の考察がなされている。そして、第7講義では、カントの道徳理論における誤謬が強調されるところのキリスト教の教義に対して想定される道徳的な難点を分析している。第7講義および最終講義では、神の恩恵の影響だけでなく、道徳的理性の限界に関してもまた、しるしとしての信仰の重要性に注意を向けている。

マンセルの論争以前にも、モーリスがマンセルと論争を引き起こしており、マンセルの学説をめぐる論争はとても大きなものであった。マーシャルは、J.S.ミルのマンセル批判に大きく影響を受けていた。ゆえに、彼もまたマンセルの学説に十分納得したわけではなかった。マーシャルは、「彼[マンセル]がそれ[自意識と一致する精神]について詳しく述べていたことや、進化学説との関係において真剣に考慮した形跡はまったく見られない」(Marshall 1867a, p.101)と指摘しているのである。

このように、第一論文では、精神現象の物理的側面と精神的側面に対する分析方法に焦点があてられており、マーシャルの問題関心——精神現象の分析や、自意識と進化概念の関係——に対する具体的な考察は、第二論文および第三論文において検討される。

第二論文「フェリエの第一命題」では、連合主義心理学者ペインの発達心理学に関する分析を肯定する形で人間の精神現象について考察がなされている。例えば、マーシャルは次のように指摘している。

もしこのこと[精神現象の連鎖]が、機械がある出来事を予期することができるということを意味するのなら、…われわれは機械がある事象を予想しうることを見出す。…必要とされているものは、意識的な自己の普遍的要素である。機械的現象を精神現象に変換することができるということは、われわれが完全な状態において自我や非我(Ego and non-Ego)と呼んでいる複雑な観念を構築するのに必要とされ、同様にそれは、種あるいは個人において他のあらゆる複雑な観念を構築するのに必要である。

(Marshall 1867b, p.109)

マーシャルは、機械において機械的現象から精神的現象への変化を説明することができるのなら、人間の精神現象を説明できるのではないかと考えたのである。この分析は第三論文「機

械論」において全面的に展開される。

さらに、マーシャルは「フェリエの第一命題」の論を閉じるにあたって、「スコットランド学派が二つの側面[自我の主観的側面と客観的側面]の区別を認識していないという理由から、私は彼らを批判する」(Marshall 1867b, p.110)と述べている。マーシャルによれば、スコットランド学派⁵⁾は、自我の主観的側面のみが人間の根本的原理であると確信していたため、自我の客観的側面を科学的に分析しなかったというのである(ibid., p.110)。ここでマーシャルが批判しているのは、スミスの『道徳感情論』に代表されるような自我の主観的側面に関する分析であろう。このようにして、第三論文では、連合主義的心理学の分析手法を用いて、外的環境から影響を受け、さらに外的環境に働きかける人間の意識メカニズムが考察されるのである。次項では、マーシャルの主張する自我の客観的分析という視点を意識して第三論文について検討する。

(3) 「機械論」における共感の概念

第一論文「節約の原則」および第二論文「フェリエの第一命題」の検討を通じて、少なくとも二つの課題が明らかにされた。一つは、スコットランド学派の試みなかった自我の客観的側面の科学的分析であり、いま一つは、マンセルの試みなかった自意識と進化学説との関係の考察である。「機械論」では、これらの問題が扱われる。そして、「機械論」の最終的な目的は、実際の人

5) スコットランド学派(Scottish schoolという名称には、二つの学派が含まれる。一つは、スコットランド常識哲学を指す狭義の学派である。この学派は、ヒュームの『人間本性論』における経験論の批判を議論の発端にしている。もう一つは、スコットランド啓蒙として知られているスコットランド哲学の全般的内容に与えられる広義のものである。マーシャルは後者の意味において用いていると考えられる。スコットランド学派に関する詳しい解説は、『イギリス哲学・思想事典』を参照されたい。

間が行う道徳的行為に関する複雑な意識メカニズムの解明にある。しかし、何の準備をすることなしに、道徳的行為に関する人間の意識メカニズムを説明することは不可能である。そこで、マーシャルは連合主義心理学⁶⁾の説明原理を用いて、第一に、外的環境の変化を考慮しない場合⁷⁾と考慮する場合について機械的人間の機械論的な精神現象を考察するのである⁸⁾。第二にマーシャルはこの分析を土台にして、知的教育——言語や代数、幾何学、音楽など——によってもたらされる主体的な能力形成に関する考察が行う。西岡(1997)や Raffaelli(2003)は、マーシャルがC.バベッジのオートマトンを参考にしていたことに注目することによって、「機械論」の論点が主体的な能力形成にあるとした。ところが、これまで考察してきた第一論文「節約の原則」や第二論文「フェリエの第一命題」の論点を踏まえれば、「機械論」における論点は、主体的な能力形成という機械論的考察にあるというよりも、むしろ実際の人間の異質的な精神現象を科学的に解明することにあると考えられる⁹⁾。

したがって、マーシャルは機械的人間に対す

る知的教育について論じた後、他者との関係における人間の道徳的な意識メカニズムを科学的に解明することを試みるのである。すなわち、他の人々の快樂のために自らの快樂を犠牲にする道徳的行為の意識メカニズム——これをマーシャルは共感の原理という——が考察されるのである。マーシャルは、連合主義心理学の説明原理を用いて共感のメカニズムを次のように分析している。

他の機械的人間が石炭(coal)を必要としていることを知覚するというを想定しよう。この観念は、より多くの石炭の観念を機械的人間に生じさせる。さらに、この観念は、より多くの石炭を他の機械的人間にもたらすという行為を生じさせる。そして、[そのような観念の]連合は、仮に機械的人間が自らの蓄えから石炭を取り出す場合に生じるであろう抵抗心にも関わらず、効果的なもの[結果]がもたらされるほど強力となるだろう。石炭を供給された他の機械的人間を理解することの観念に由来して、連合を強める傾向をもつ快樂を導くのである。これらは、異なる機械的人間において私がさまざまな道徳的行為と呼ぶものであろう。

(Marshall 1868a, pp.129-130)

端的に示せば、マーシャルの共感の原理は次のようなプロセスとして説明できる。第一に、機械的人間は他の機械的人間の行為を観察・知覚し、他の機械的人間が財を欲しているという

- 6) 心理学において association という用語は、「連想」と訳す場合と「連合」と訳す場合がある。今田(1962, p.107)によれば、本来は観念(想)と観念(想)が結びつくという意味で連想という訳語が用いられていたが、現在ではその意味が拡大され、ある単純な感覚が複雑な自体を思い起こさせることや、感情と観念の結びつきをも意味するようになったという。さらに、自ら進んで行うような行動単位の結合も含むようになったため、「連想」という代わりに、より広い意味で「連合」が用いられるようになったと述べている。
- 7) 西岡(1993; 1997)の指摘するように、経済学における他の条件を同一にして——*Ceteris Paribus*——という仮定を設けた静態分析が複雑な動態分析の出発点となるというマーシャルの分析方法は、この「機械論」の分析方法に端緒を見出すことができる。
- 8) 「機械論」に関する詳細な議論は、西岡(1993; 1997), Raffaelli(2003), 松山(2008)を参照されたい。

- 9) マーシャル経済学への彼の心理学研究の影響について、西岡(1997; 2003)や Raffaelli(2003)の論点は、本稿の論点と異なる。特に、Raffaelli(2003, pp.52-53)に明確であるが、ラファエリは『原理』第四編で展開される組織の複雑化を、神経生理学的(neurophysiological)に捉えることから、「機械論」における人間の意識メカニズムに関する分析が、マーシャルの産業組織の議論の基礎になっていると解釈する。ところが、本稿は、Cook(2006b)と同様に、マーシャル経済学における教育の役割にこそ、マーシャルの心理学研究の影響があると考ええる。

状態に関する観念を生じさせる。第二に、他の機械的人間の財を欲するという状態を知覚した機械的人間は、自らの精神的な苦痛を伴う場合であっても、より望ましいと想像される結果を予測し、脳内で観念の連合を緊密にする。最終的に、財を提供することによって生じる他の機械的人間の感情に関する観念は、観察者である機械的人間自身に快楽を生じさせ、より強い観念連合の形成を可能にするというものである。このように、マーシャルの共感のメカニズムは、機械的人間の自己犠牲的な行為を取り上げることから説明されるのである。さらに彼は、共感のメカニズムを媒介にした種の生存に関する議論を展開している。すなわち、

私はついでながら、これら[道徳的行為者の]種を保っている自然選択の力に注意を向けなければならぬ。自然選択の力の中で共感の原理は最も強力である。

(Marshall 1868a, p.130)

本節で考察してきた共感のメカニズムに関する機械論的な説明では、個と個の関係に焦点があてられていたが、ここでは種という集団に考察の対象が広がられている。それゆえ、前者の分析が静態的であったのに対して、後者の分析には、静態において捉えることのできない動きをみる動態的な視点が導入されているのである。しかしながら、「機械論」において、共感の概念と進化学説が関係づけられた考察は上記の引用文のみである。したがって、ここでは、自然選択の作用がはたらく動態的過程において、共感の原理に基礎づけられた行動を行う機械的人間によって構成される種が生き残るということを描き出すにとどまる。共感の概念と進化の概念との関係に関するより詳細な検討は、マーシャルの名著『経済学原理』(以下、『原理』と表記)で行われる。それゆえ、これらの具体的な考察は第4節で行い、次節では、マーシャルの共感の概念の源流について検討する。

3. マーシャルの共感の概念の源流

磯川(1988, 24 頁)や岩下(2008, 69 頁)が指摘するように、『原理』で展開される「分化と統合」に関するマーシャルの議論は、スペンサーの社会有機体説から影響を受けたものである。ところが、前節で見てきたように、マーシャルに対するスペンサーの影響は1860年代後半の心理学研究のなかに明確に見出される。また、磯川(1988, 18-19 頁)によれば、スペンサーの社会有機体説の鍵概念は共感にあるというのである。このようにして、マーシャルの経済成長理論においても共感の概念が重要な役割を担っているのではないだろうかという疑問がおよずと生じてくる。この点を明らかにするために、まず本節では、スペンサーの共感の概念について詳細に検討する。そして、その手がかりをスペンサーの『社会静学』に求める¹⁰⁾。第一に、スペンサーの『社会静学』で扱われる共感の概念を明らかにする。第二に、スペンサーの共感の概念と教育の関係について考察する。そして最後に、マーシャルの心理学研究の発端とされるヒュームの『人間本性論』に着目し、ヒュームの共感のメカニズムについてまとめる。

10) 本稿は、マーシャルの参照した可能性が最も高いと思われる Spencer, H. 1868. *Social Statics; or The conditions essential to human happiness specified, and The first of them developed*. London: Williams and Norgate. を参照する。この点については、ケンブリッジ大学マーシャル・ライブラリーのローランド・トーマス氏より以下の情報を提供していただいた。“I have checked our catalogue and I can see the we have Marshall's copy of Spencer's Social Statics published in 1868.....” (From Rowland Thomas, 2008/12/09) 電子メールの一部を抜粋。しかしながら、必ずしもマーシャルが1868年版のみを参照したと断言することはできない。なぜなら、マーシャルは、1867年にグロート・クラブにおいて報告した第一論文「節約の原理」のなかで、すでにスペンサーの共感について指摘しているからである (cf. Marshall 1867a, p.99)。この点を考慮す

(1) スпенサーの共感の概念

スペンサーは、「有機体の進歩(organic progress)が同質的なものから異質的なものへの変化にあるということは、議論の余地がない」(Spencer[1857]1911, p.154 訳 400 頁)と述べており、進歩の本質を同質から異質への変化に求める。このような変化は、社会を構成している多数の個人による幸福の追求から生じるという。そして、スペンサーは、「多くの人が集まっている状態(multitude)において、人間性(humanity)の支配的な権利に対する法の第一原理は、孤立した状態(unitude)にある人間性の中に見出さる。つまり、社会的平衡(social equilibrium)の依存する道徳的諸能力は、社会的原子である人間に内在しているものであり、仮にわれわれがそれらの諸力の性質やその安定化の法則について理解している場合、われわれは人間の本質の中にそれらを見つけ出さねばならない」(Spencer 1868, p.29)と述べる。このようにして、彼は社会を構成する個々の人間に内在する道徳的な諸能力に注目するのである。例えば、各々の人間が社会的に悪となるような行為を抑制する諸能力を身につけることが大切であるとスペンサーは考える。このような発想は、国家が社会や個人に対して干渉すべきではないという彼の自由主義的な思想にもとづいている。

スペンサーはまた、「道徳的な法則は、人間

のある特性から生じている。『最大多数の最大幸福』といったような集計された状態を前提条件とすることなしに表現されえないような、あらゆる根本的な学説の適応に対してわれわれは警告する」(ibid., p.29)と述べている。彼は、幸福や快樂の可測性を前提とし、それらの増大を導く行為を善と規定することによって、人々の幸福や快樂の総和の単純な増大が社会的な善となり繁栄であるとする議論を受け入れないのである。そこでスペンサーは、道徳的で社会的な能力の獲得を説明する原理として進化の法則を持ち出し、各個人が自由に行動することを前提にして、どのように社会の調和や安定がもたらされるのかを考えるのである。すなわち、適者生存の法則のもとで生存する人々の道徳感情に注目するのである。

このようなスペンサーの問題意識は、「各人が、自らの行動の自由を主張し、擁護するように人々を導く私権(personal right)に関する本能を純粋に利己的な本能であるとみなすとするれば、他人の権利に関する認識はどこからやってくるのだろうか？」(ibid., p.114)というものである。言い換えれば、自らの利己的な本能と他者の権利はどのようにして調和しているのだろうかということになろう。このような課題に対して、スペンサーは次のように述べる。

この困難の解決への道は、アダム・スミスの『道徳感情論』によって開かれている。

(Spencer 1868, p.114)

ると、1868年版『社会静学』以外に、1851年版および1865年版の『社会静学』もまたマーシャルによって参照された可能性がある。しかし、1851年版および1865年版の『社会静学』は、各所蔵図書館において経年による劣化のため貸出禁止図書に指定されており、今回、論文を執筆するにあたって、それらを参照することができなかった。したがって、本稿では、実際にマーシャルが所持していたことが確認できている1868年版の『社会静学』と、1851年版の『社会静学』を詳細に分析している磯川(1988)を手がかりにして、スペンサーの共感について暫定的な解釈を提示することを断っておきたい。

スペンサーは、人間の他者の存在や権利の認識の起源について詳細に検討したアダム・スミスの『道徳感情論』に注目するのである。『道徳感情論』では、利己的な存在としての人間が仮定されており、スミスは、このような利己的な人間同士が互いの立場や境遇について自然には理解することのできない社会を想定したのである。スミスは、利己的な人々が、いかにして共感という「想像上の立場の交換」によって他人の

立場や境遇を認識し、彼らが共存しうるのかを分析している。『道徳感情論』において共感とは、社会の調和や秩序を維持する源泉として位置づけられている。スペンサーは、このようなスミスの共感の概念に注目して、『道徳感情論』より以下の四つの文章を抜粋している (Spencer 1868, pp.114-115)¹¹⁾。

繊細な性格と弱い身体構造をもった人々は、街頭の乞食たちによって見せつけられるただれや潰瘍を見ると、彼ら自身の肉体の対応部分に、むずむずする感じや不安な感じをもちやすいと訴える。¹²⁾

もっとも頑丈な体つきの人々でも、ただれた目を見ると、しばしば彼ら自身の目に、非常によく感じられる痛みをもつものであって、その痛みは同じ理由からくるのだ、といっている。¹³⁾

われわれの関心をひく悲劇や騎士物語の中心人物たちが救い出されることに対するわれわれの歓喜は、彼らの困苦に対するわれわれの悲嘆と同じく真剣なのであり、彼らの悲惨に対するわれわれの同胞感情が、彼らの幸福に対するそれよりもほんものだというわけではない。¹⁴⁾

われわれは他人の不謹慎と粗野について、彼自身は自分のふるまいが不適切だという感覚をなにももたないように見えても、赤面するのである。¹⁵⁾

上記の四つの引用文から明らかなように、スペンサーは、自らが他者の悲惨な立場に置かれた場合に、何を感じ、想像するのかという同胞

感情を共感として把握している。このように、スペンサーは、同胞感情としての共感を基礎にして、人々が他者との間で調和を維持していると考えていたのである。さらに、スミス自身は、「われわれは、他の人々が感じることにについて直接の経験を持たないのだから、彼らがどのような感受性を受けるかについては、われわれ自身が同様な境遇において何を感じるはずであるかを心に描くよりほかに観念を形成することができない」(Smith[1776]1976, p.9 訳[上]24頁)と述べている。つまり、前述したようにスミスは、「想像上の立場の交換」を共感の説明原理として指摘しているのである。スペンサーの『道徳感情論』に対する指摘から推測して、スペンサーはこのようなスミスの説明原理もまた参考にしていたと考えられる。

しかしながら、スペンサーは必ずしもスミスの共感の概念をそのまま受け入れたわけではない。彼は次のように述べている。

彼[アダム・スミス]は、もっとも重要な適用のひとつを見落とした。…彼は、正義の感情が私権——その内省的な機能の一種——に関する本能の共感的感情以外のなにものでもないことを認識していなかった。

(Spencer 1868, p.116)

つまり、スペンサーは正義と共感が同一のものであるとみなすのである。それでは、スペンサーのいうように、スミスは正義と共感の感情が異なるものとして認識していたのだろうか。

スミスは『道徳感情論』のなかで二種類の徳について議論している。一つは「慈善(Beneficence)」であり、もう一つは「正義(Justice)」である。前者の「慈善」は、常は無償であって、それは力づくで奪い取られるものではあらず、その単なる欠如は、いかなる処罰にもさらさ

11) スペンサーは、スミスの『道徳感情論』における参照ページ数を記していない。したがって、以下の脚注に、該当すると思われるスミスの原著および訳書のページ数を示した。

12) Smith[1759]1976, p.10 訳[上]26-27頁

13) ibid., p.10 訳[上]27頁

14) ibid., p.10 訳[上]28頁

15) ibid., p.12 訳[上]32頁

れない。なぜなら、慈善の単なる欠如は、何も現実的で積極的な害悪をもたらす傾向がないからである」(Smith[1759]1976, p.78 訳[上]205 頁)というものである。他方、後者についてスミスは、「遵守することで、われわれ自身の意志の自由を置き去りにしないという、もう一つの徳がある。それは、力づくで強制されてもよく、その侵犯は憤慨の、したがって処罰的となる。この徳が正義である」(ibid., p.79 訳[上]207 頁)という。すなわち、スミスにおいて、慈善は、それが欠如している場合であっても処罰の対象にはならないという徳であり、正義は、自らの意志の自由を侵す場合に処罰の根拠となる徳である。さらに、スミスは正義との関係において「憤慨(Resentment)」という感情が重要であるという。なぜなら「憤慨は、防衛のために、そして防衛のためにのみ、自然によってわれわれに与えられたように思われる。それは、正義を保護するものであり、罪を犯さぬようにする安全保障である」(ibid., p.78 訳[上]205 頁)からである。つまり、正義に基づく処罰は憤慨の自然的帰結とされている。ゆえに「社会は、正義の諸法がかなりよく守られなければ存立することができない」(ibid., pp.87-88 訳[上]227 頁)のである。

このように、慈善と正義はいずれも社会を構成していくうえで重要な役割をはたすのだが、特に後者の影響は大きく、その判断は「想像上の立場の交換」によってなされる。正義の判断を「想像上の立場の交換」によって分析するためには、行為者、被行為者、観察者といった、二つの実在的な主体と一つの意識的な主体を想定しなければならない。「想像上の立場の交換」では、観察者という中立的な意識主体が想定され、その観察者が実在する行為者による被行為者に対する行為を観察する。そして、観察者が行為者の感情に対して是認するか否かの判断を行うのである。したがって、スミスが正義について議論する場合、「われわれが受難者の憤慨に入り込むことが、われわれの心が前もって行

為者の諸動機を否認し、それらに対するすべての同胞感情を放棄するのでないかぎり、たしかに不可能であるように、この理由で、[行為の不適宜性に対する]欠陥についての感覚も、…二つの区別された情動からなっていると思われる。行為者の諸感情に対する直接の反感と、受難者の憤慨に対する間接の共感」(ibid., p.75 訳[上]196 頁)の二つが考えられる。すなわち、行為者の諸感情への直接的反感と被行為者への間接的共感から、観察者による正義の判断が行われているという点に注目するならば、確かにスミスは、正義が共感から直接的に生じるとは指摘していない。正義と共感は、分析上の次元が異なっているのである。それゆえ、スペンサーは、スミスが共感と正義を区別していたと解釈するのである。

このようにして、スペンサーは、「われわれが、公平なこと、公正なこと、正直なこととして描写するものは、私権(personal right)に関する本能の共感的な興奮から溢れ出てくるものであり、一方で、哀れみ、慈悲心、善良な性質、寛容、協和、思いやりといった他のものに常に分けられているこれらのものは、…共感の作用に起因している」(Spencer 1868, p.116)という。スペンサーの場合、正義は本能的な共感から生じるものであり、そして哀れみなどの諸感情は同胞感情としての共感によって生じると考えられている。したがって、スペンサーの共感の概念は、中立的な観察人という意識主体を考慮していないという点で、スミスの共感の概念と相違していると考えられるのである。

ところが、「一般的規則は、一定の種類の、あるいは一定の事情におかれたすべての行為が、是認または否認されるということを経験から知ることによって形成される」(Smith[1759]1976, p.159 訳[上]330 頁)という点において、スペンサーとスミスの意見は一致している。つまり、スペンサーの場合も、ア・プリオリに共感が正義に対して是認や否認としていると考えられていないのである。スペンサーは、行為者

の行動の自由という観点において、スミスの意見に賛同している。それゆえ、「行動の自由を維持している刺激が他人の行動の自由に対する関心を引き起こしうる仕方は、共感に関するアダム・スミスの学説を拡張することによって説明することができる」(Spencer 1868, 120-121)と述べるのである。このようにして、社会の安定化の源泉が、自由に行為を行う人々の道徳的諸能力、すなわち共感にあることが示されるのである。さらに、適者生存の法則のもとでは、当該社会を構成する各々の人間が同胞感情としての共感を働かせねばならない。このようにしてはじめて、すべての人々が平等に最大満足を得るというスペンサーの思想が成立するのである。しかしながら、人々はどのようにして同胞感情としての共感を働かせることができるようになるのだろうか。次項では、スペンサーの共感の概念と教育について考察する。

(2) スペンサーの共感の概念と教育

スペンサーの社会有機体説では、社会の諸機能が分化と統合を繰り返すことによって進化が進んでいくとされている。すなわち、生物におけるのと同様に、社会・経済においても、分化した諸機能がそれに対応した諸機能を統合することによって、相互依存性を強め、その存続を可能にするのである。ところで、アダム・スミスは、利己的な人間が想像上の立場の交換を行うことによって、正義に対する是認や否認が判断され、人々の共存が可能になると考えていた。したがって、スミスの『道徳感情論』では、共感によって複数の利己的な人間の間にも秩序が形成され、社会の調和が維持されることが指摘されているのである。このようなスミスの議論を考慮していたスペンサーは、社会秩序の形成について、「社会は諸個人で構成されているのであり、社会において行われるすべてのことは、諸個人の行動を結合させることによって行われる。それゆえ、個人の行動のなかにのみ、社会現象の解決が見出されうるのである。とこ

ろが、諸個人の行動は、彼らの本性に関する法則に依存している。そして、これら[人間本性]に関する法則が理解されるまでは、彼らの行動が理解されうることはない」(Spencer [1859] 1911, pp.29-30 訳 472 頁)と述べる。前項で考察したように、スペンサーは諸個人の行動を分析するにあたって、それらを動機づけている道徳感情、すなわち同胞感情としての共感に注目していた。それはまた、社会の秩序の源泉でもあった。したがって、ここでは人々に共感の心をどのように生じさせるかという問題を、教育を通じて解決しようとしたスペンサーの試みについて検討する。

スペンサーは、『社会静学』第二部第十七章を中心に、教育と共感の関係について論じている。彼は教育の目的を次のように説明する。

教育は、性格形成をその目的としている。子供を均整の取れた調和的な状態の人に最終的に発達させるために、反抗的な性向を抑制すること、感情(sentiment)を休眠状態からよび起こすこと、気持ち(feeling)を促進することや抑制すること、これらが両親や教師の互いの狙いなのである。

(Spencer 1868, p.201)

スペンサーがこのような指摘を行った背景には、「子供の生死や道徳的に繁栄するか衰退するかということは、彼らの扱い方に依存しているけれども、親になる人々に子供の扱いについて一片の教育も施されていないというのは、それほど驚くようなことではない」(Spencer [1857] 1911, p.21 訳 464 頁)というように、道徳的衰退が道徳的衰退を生み出すという悪循環が存在していたからであると考えられる。このような認識にもとづいて、スペンサーは家庭内における道徳教育を考察するのである¹⁶⁾。

スペンサーは、人間本性を向上させる原動力が共感にあると考えており、さらに「共感は訓練によってのみ強化されうる」(Spencer 1868,

p.203)という。彼は、子供たちに共感の能力を獲得させるために家庭内教育を、とりわけ父親による教育を重視する。Spencer(1868, pp.201-202)によれば、共感という非利己的な感情を育むには、父親の作り出す家庭内における養育環境が重要であり、それはまた父親の義務であるという。そのため、父親は、子供に家庭内の取り決めを教え込み、不従順な場合には勘当を言い渡し、家庭内のあらゆる口論の調停者として権威を示す存在でなければならない。そこで、スペンサーは次のような例を挙げる(Spencer 1868, p.202)。いま、他人のことを考えることのない無愛想ないたずらっ子がいたとする。彼は、自分の快樂ばかりを追いかけているため、突然大声で叫んだり、友達をからかったり、他の子のおもちゃを横取りしようとする。そのような場合に、父親は、「言うことを聞け(Do as I bid you)」と鋭く言うことや、鞭打ちや監禁をほのめかすなど、自らの命令に子供を服従させる義務を果たさなければならない。このようなスペンサーの主張は、「利己的な子供には、他の子が望んでいることに対する同胞感情を生じさせるだけで利己的ではなくなる」(ibid., p. 203)という彼の認識にもとづいている。したがって、スペンサーは、命令-服従理論(command-and-obedience theory)を前提にした教育を施すことによって、「われわれの社会的悪が主に起因している非共感的性質」(ibid., p.202)を変質させることができると考えたのである。

また、共感的感情は刺激されることによってのみ増大する。そして、すべての人々に共感を

浸透させるという意味において、幼年時代における父親主導の家庭内教育は子供の性格形成において重要な役割を果たす。スペンサーの描く理想的な社会において、共感にもとづく行動は、適者生存の法則のもとで人々が存続するための必要条件である。そうであるからこそ、人々の自由な行動が各人の最大幸福を達成するのである。このようなスペンサーの発想もまた、「人間社会の全成員は、相互の援助を必要としており、同じように相互の侵害にさらされている。その必要な援助が、愛情から、感謝から、友情や尊敬から互恵的に提供されている社会は、繁栄し、幸福である」(Smith[1759]1976, p.85 訳[上]222 頁)というスミスの発想と類似しているように思われる。

したがって、スペンサーが共感について論じる場合、その基礎はスミスにあることは明らかである。さらに、マーシャルがスペンサーの議論を参考にしていたことを踏まえれば、マーシャルもまた、スペンサーを介するかたちでスミスの議論から影響を受けていた可能性を否定することはできないように思われる。ところが、共感という道徳感情に関する学説は、スミスの『道徳感情論』だけでなく、ヒュームの『人間本性論』によっても大きな進展を遂げている。次項では、マーシャルの心理学研究に対するヒュームの影響を考慮して、ヒュームの共感のメカニズムについて概観する。

(3) ヒュームの共感のメカニズム

西岡(1993, 73 頁)によれば、マーシャルの「機械論」はヒュームの連合主義心理学を根本にしているという。マーシャルの心理学研究が連合主義心理学の説明原理を採用していたことを踏まえれば、彼の共感の概念もまたヒュームのそれから影響を受けていないと断言することはできないように思われる。そこでまず、ヒュームの『人間本性論』において示される共感についてみてみよう。すなわち、

16) マーシャルもまた一般的な知性や知識が青少年時代の家庭環境に依存していることを『産業経済学』などで主張している。しかし、マーシャル経済学で扱われる教育において、父親の役割は母親以上のものではない(Marshall1961, p.207 訳[二]107 頁)。マーシャルの家庭内における母親の役割を扱っている研究には、Pujol(1992)やGroenewegen(1994, 1995)などがある。

およそ人間本性に関して、それ自身やその結果の双方において最も顕著な性質(quality)には、他人に共感する偏向(propensity)や、他人の性向(inclination)や感情(sentiments)がわれわれ自身のそれと異なっていたとしても、あるいは反対であったとしても、それらを交換伝達(communication)によって受け取ることに勝るものはない。…憎悪(hatred)、復讐(resentment)、軽重(esteem)、愛情(love)、勇氣(courage)、好機嫌(mirth)、憂鬱(melancholy)といったこれらすべての情緒(passions)を、私は自分自身の自然の気質や気性から感じるよりも、交感伝達から多くを感じるのである。

(Hume[1740]1964, vol.2, p.111 訳[三]69 頁)

このように、ヒュームの共感、感情などの交換伝達とされているのであり、そのメカニズムは次のようにまとめることができる(ibid., p.112 訳[三]70-71 頁)。第一に、人間は常に観念と印象を等しく生じさせているのであり、脳において連合が自然におこなわれる¹⁷⁾。さらに、類似あるいは近接によって連合が促され、自らに関係のある事象のすべてが連合によって自身のなかに生じる。第二に、人間一般において身体および心の仕組みは、おおそ似通っているため、他人のうちに生じる情念ないし原理は、自分自身においても程度を異にしつつも生じさせることができる。それゆえ、性格、国土や言語が似ている場合は、人々の間において共感が促進される。ヒュームにおいて共感、想像によって、観念が印象に転換されることから生じる情念に起因しているのであり、ある観念の形成が自然に新たな情念を生じさせることをいうのである。このようにしてヒュームは、共感が

人間相互の情緒の交感伝達であることから、「すべての情念はひとりの人物から他の人物へ即座に移って、すべての人間に対応的な運動を生む」(ibid., p.335 訳[四]186 頁)と考えたのである。さらに「われわれはただ他人の感情の原因あるいは結果を感知するだけである。われわれはこれらから感情を推論する。したがって、これらがわれわれの共感を生起させるのである」(ibid., pp.335-336 訳[四]186 頁)とヒュームは述べている。

ところで、スミスの共感の概念では、利己的な人間によって構成される社会が想定されていた。そして、社会秩序の安定化のために人々による共感が極めて重要な働きをしていた。この点において、スミスとスペンサーの類似性を見出すことができた。すなわち、スペンサーの場合も、適者生存の法則のもとで存続する人々の人間本性に、共感を含む道徳的諸能力が備わっていたからである。このように、スペンサーの体系では、人間は社会が分化や統合を繰り返す間に相互依存性を高め、それにより社会の安定や秩序がもたらされると考えられていた。しかし、当然のこととして、ヒュームの共感のメカニズムは進化の概念との関係において用いられていない¹⁸⁾。例えば、社会の安定化への説明原理として、スミスは行為の適宜性の判断を「中立的な観察者」に求めた一方で、ヒュームは、スペンサーと同様に、行為の是認と否認などの判断がなされる具体的な説明原理を持ち合わせていないように思われる。ヒュームは次のように指摘するのである。

18) ハイエクは「ディヴィッド・ヒュームの法哲学と政治哲学」(1963)において、ダーウィンの進化論の源泉がヒュームの思想にあるという。より詳細には、ダーウィンが「永続的な戦争は、すべての人間や動物の間で引き起こされている」(Hume[1740]1964, vol.2, p.436)というヒュームの言葉を受けて、「生存闘争(struggle for existence)」を用いたと指摘しており、ヒュームからダーウィンへの思想が連続的であることを詳しく跡づけることができると指摘する(Hayek [1963]1967, p.119 訳 155-156 頁)。にもかかわ

17) 『人間本性論』では、知覚において弱いものが観念であり、強いものが印象であるとされている(Hume[1740]1964, vol.1, p.311 訳[一]27 頁)。例えば、われわれは病人の苦痛を感じることができる。それは想像の役割にものであるのだが、病気の苦痛に関する観念が印象に転換することによって病人の苦痛を感じるのである。

徳と悪徳とは…われわれのうちに真の苦痛と快楽とを生み出していることを認めなければならぬだろう。…おおよそわれわれに利益あるいは損害をもたらす傾向のある、一切の情緒や習慣、性格の変化は、歓喜または不快を生み出し、そして、これから賞賛ないし非難が起こるのである。

(Hume[1740]1964, vol. 2 p.92 訳[三]39 頁)

ヒュームにおいて快楽と苦痛は徳や悪徳と不可分な関係にある。ところが、ヒュームは、それらがいったい何によって——スミスにおいては、中立的な観察者によって——判断がなされるのかについて指摘していないのである。特に、悪徳に関する説明では、「例えば、故意の

らず、ハイエクは、この指摘の脚注において次のように述べるのである。「最も直接的な経路はエラスムス・ダーウィンにあるようであり、彼は明らかにヒュームによる影響を受けており、彼の孫[チャールズ・ダーウィン]に対する影響は疑う余地がない」(ibid.,119 訳 163 頁、強調は引用者、以下も同様)。すなわち、ヒュームからダーウィンへの連続性に対する明示的な証拠を示していないのである。くわえて、ハイエクはまた、『法と立法の自由』(1979)においても「チャールズ・ダーウィンによる生物学へのその[文化的進化という考えの]応用は、…彼の祖父エラスムス・ダーウィンを通して、バーナード・マンデヴィルやディヴィッド・ヒュームの文化的進化の概念から引き出されたということもありうるだろう」(Hayek 1979, p.154 訳 213 頁)という曖昧な表現にとどまっており、この文章の脚注において、この議論の詳細が「バーナード・マンデヴィル博士」(1967)に表されていると述べる。そこでハイエクの指示に従って Hayek (1967)を見ると、進化概念の学問的影響について、「もちろん、私[ハイエク]はマンデヴィルがダーウィンに直接的な影響を与えたと示唆するつもりはない。けれども、ヒュームはおそらく[ダーウィンに直接的な影響を]与えただろう」(Hayek [1967] 1978, p.265 訳 124 頁)というのである。このように、ハイエクが、ヒュームからチャールズ・ダーウィンへの直接的な思想の連続性に関する具体的な根拠を提示していないことから明らかなように、実際には、「ダーウィンの進化論の源泉はヒュームにある」というハイエクによる主張の妥当性は不明である。

殺人を想定してみよう。この行動をあらゆる方面から検討して、悪徳と呼ばれる事実ないし真の存在を見出すことができるかを見てみよう。どのように見た場合であっても、あなたは若干の情緒・動機・意志(volitions)・思想のみ見出しうる。…あなたは、その省察をあなた自身の胸中へ向け、そして、この行動に対してあなたの心のうちから生じる非難の感情を見出すまで、それ[悪徳]を決して見出すことができない」(ibid., p.245 訳[四]32 頁)というように、徳に対する感情的な承認ないし否認が行為に結びついていることを指摘しているのである。したがって、ヒュームの『人間本性論』では、スミスの指摘するような「中立的な観察者」の役割を担っている諸個人に内在している原理を見出すことができないように考える。

以上より、ヒュームとマーシャルの類似性は、説明原理としての連合主義心理学に見出すことができるのだが、共感の概念において彼らの間に影響関係はないように思われる。したがって本稿では、マーシャルの共感の概念の源泉は、ヒュームではなく、スペンサーを介するかたちでスミスにあると考える。そこで次節では、これまでの議論を踏まえて、マーシャル経済学における教育の役割との関係において、彼の共感の概念がどのように位置づけられるのかについて考察する。

4. マーシャル経済学における共感の概念と教育の役割

マーシャルは 1870 年前後に、心理学研究が当時の社会状態を正当化しえないと考えるようになり¹⁹⁾、次第に経済学への関心を強めていく(Keynes[1933]1972, p.171 訳 133-134 頁)²⁰⁾。ところが、松山(2008)の指摘するように、マーシャルが心理学研究において探求した人間の能力の発達の可能性は、経済学における「人間本

19) マーシャルの心理学研究から経済学への移行問題については、別の機会に詳細に論じる。

性の柔軟性(the pliability of human nature)」(Marshall 1961, p.764 訳[四]281-283 頁)に反映されている。さらに, Cook (2006b)によって指摘されたように, マーシャルの心理学研究と経済学は教育という点において連続性を有している。したがって, 本節では教育によって変化する人々の行動原理を共感の概念との関係から, 労働者階級とビジネスマンの各々について考察する。

(1) 労働者階級に対する教育と共感の概念

「最終効用度(the final degree of utility)」を提唱したジェヴォンズは, 労働者階級を取り巻く環境に関する実際的な問題の解決を目指して, 労働者階級への教育の必要性を主張したのだが(阿部 2000, 63-66 頁), その一方で, マーシャルは, 最貧階級(residuum)の縮小を目指して, 社会を構成する人々が「将来を実感する能力」を獲得することの重要性に焦点を当てたのである。

1873年にケンブリッジ大学のリフォーム・クラブで発表された「労働者階級の将来」は, マーシャルが労働者階級への教育の必要性を経済学研究の比較的早い段階から認識していたことを示している。さらに1879年に出版された『産業経済学』では, 「文明の進歩とともに, より一層の進歩のためには労働者階級への教育の普及が前提となってくる」(Marshall and Marshall 1881, pp.10-11 訳13 頁)というように, 労働者階級に対する教育の必要性を強く主張している。特に, 生産諸要因に関する考察は, 彼の労働者階級に対する教育の役割に関する原型を

形作っている。

このように, マーシャル経済学における教育の内実は, 『産業経済学』において初めて体系的に示される。まず, 彼は, 教育を「教養(general)教育」と「技術教育」の二つに区分する。前者は, 「人間が通常の人生上の問題について知的な意見をもつことを, そしてまた新しい緊急な問題に遭遇する差異の臨機の才を養うことを目的とせねばならない」というものであり, 後者は「職業領域において生じるすべての事柄の理由を理解するのに役立つべきであり, またそれゆえ, 生産の新しい機会や新しい方法に自らを適応させていくことを可能にするのに役立つはずである」と指摘される(ibid., p.11 訳14 頁)。くわえて, 「技術教育は人間の手先の訓練をも必要とする」(ibid., p.11 訳14 頁)のである。さらに『原理』では, 「技術教育は徹底した教養教育と同じ土台の上の築かなくてはならない」ため, 具体的には, 「学校を卒業したのち数年間を, 冬の六ヶ月間を大学(College)で科学を学び, 夏の六ヶ月間は大きな工場で研修生(articleed people)として働くことが良い計画である」(Marshall 1961, pp.209-210 訳[二]111 頁)と指摘している。したがって, マーシャルは, 直接的な経験が学校教育に平行して行われることが重要であると考えていたのである。

さらに, マーシャルはこのような教育を通じて, 労働者階級の人々が, 産業上の能率の向上を達成することだけでなく, 富の蓄積を行う習慣を身につけ, 生活態度を変化させることによって質的に豊かな生活を実現できるようになると考えた。すなわち, 彼は, 教育を通じて「将来を明瞭に実感する能力」(ibid., p.562 訳[四]85 頁)の獲得を労働者階級に求めたのである。先を見通す能力こそ, 労働者階級の人々を富の蓄積へと動機付け, 彼らを貧困から助けるのである(Marshall and Marshall 1881, pp.37-38 訳47 頁)。

マーシャルはまた, 教育が親の世代から子の世代へと連続して行われた結果, 「貨幣を借り

20) マーシャルは経済学に学問探求の場を移した後も, シジウィック, モーズリー, クリフォード, モールトンと共にグロート・クラブのミーティングに積極的に参加していた(Sidgwick and Sidgwick[1906]1996, p.137)。一方で, 西岡(1996, 53 頁)によれば, マーシャルのグロート・クラブにおける活動期間は1867年から1869年の上半期にかけてであったという。

た人は利子をつけて返さねばならないのと同じように、人は自分の子供たちに自分が受けたよりも、より良い、より完全な教育を与える義務を負っている」(Marshall 1873, 117/訳 216)ということ、人々が理解するようになると考えた。マーシャル経済学において、貯蓄は家族愛(family-affections)の基礎であるとされている。家族愛は富の蓄積を行う動機であり、人々は教育を受けることによって、富の蓄積を行うようになるからである。「共感」と題された『産業経済学』の第六章第二節において、マーシャルは次のように指摘している。

より多くの富が、蓄積する者の将来の享楽のためよりは、他人のために貯蓄されている。もしも人々が、まったく利己心に振りまわされるとすれば、家族のために蓄えを残すことはしないで、自分自身のために年金に投資するだろう。

(Marshall and Marshall 1881, p.38 訳 48 頁)

このように、貯蓄は、非利己的な行動としての家族への愛情に基礎づけられている。マーシャルは、このような貯蓄を動機付けている人間の非利己的な能力を「共感」として把握している。そして彼は、このような貯蓄が産業上の能率へ結実すると認識していたため、「経済進歩が家族愛に依存している」(ibid., p.39 訳 47-48 頁)と述べる。さらに『原理』では、「家族愛(family affection)は、以前[原始的な社会]よりも、はるかに多くの自己犠牲と献身に導いている」(Marshall 1961, p.6 訳[一]9 頁)といい、「[他人に対する]共感」は、現世代より前には決して存在していなかった、ある種の熟慮された利他主義を増大させる源泉である」(ibid., p.6 訳[一]9 頁)と指摘する。このようにして彼は、「家族愛は一般に利他主義の極めて純粋な形態である」(ibid., p.24 訳[一]33 頁)と定義するのである。マーシャルが経済学で用いる「共感」は、「家族愛」や「利他主義」、「自己犠牲」、「献身」などの

源泉であると考えられる。

マーシャルは経済学において、物質的福祉だけでなく、精神的福祉の充実化もまた考察の対象に含んでいる。だが、人間の精神的側面に関する具体的な分析は経済学において展開していない。それは、彼が、経済学において経済進歩に内在する法則それ自体を探索していたためである。ところが、前節において検討したように、スペンサーは、社会の平衡が、その社会を構成する個々の人間の道徳的諸能力の源泉である共感に依存していることを指摘していた。そして、彼の社会有機体説において、共感に基づく行動は、適者生存の法則のなかで存続するための必要条件であった。マーシャルは心理学研究において、あらゆる精神現象が共感から生じていると主張したスペンサーの議論を評価していた。そして、マーシャル自身も進化との関係で共感を捉えていた。さらに、マーシャルへのスペンサーの影響は、心理学研究だけでなく、経済学においても明白に表れている。『原理』第四編第八章では、スペンサーの最適者生存の法則が扱われており、彼の社会有機体説を意識した内容になっている。そこで、スペンサーの概念的影響が強く見られる「種の保存に対する親の配慮の影響」という小題の段落を取り上げる。とりわけ注目すべきは、マーシャルが心理学研究において詳述しなかった、共感の概念と進化の概念の関係である。彼は、以下のように論じている。

家族の利害という狭い範囲を超えて種族の利害へと移ると、蜂や蟻のような、いわゆる社会的動物においては、個々の動物が自己の直接の利益を高めようとすることなく、集団のために様々な用役を最も精力的に行うような種族だけが生きながらえていくようである。しかし、人間についてみると、理性と言語をもっているので、種族を強大にしていかななくてはならない種族的な義務意識の影響は種々のかたちをとる。…次第に、[蜂や蟻のような]下等の動物の中に

もその萌芽がみられた理性にもとづかない共感が徐々に領域を広げ、行動の基礎として慎重に採用されるようになる。…それゆえ、生存競争は、結局のところ、個人が周囲の人々のために自己犠牲を最も進んで行っている人間たちの種族に生き残るように作用する。

(Marshall 1961, p.243 訳[二]161 頁、強調は引用者)

このように、マーシャルの場合も、共感は適者生存の法則のもとで生き残るための必要条件とされている。したがって、自然選択の作用の中で最も強力に作用する共感が、人々の行動原理に採用されることによって、家族愛は種族愛へと広がっていき、最終的にはそのような種族を生存競争の勝利に導くのである²¹⁾。このように、マーシャルは、経済進歩を生み出している人間行動の源泉を、共感に見出すのである。

マーシャルの心理学研究において共感は、スペンサーないしは、スペンサーを介したかたちでスミスを参考にしていて、実際にマーシャルは、スミスの『道徳感情論』や『国富論』を複数所有していた。スミスによれば、利己的な人間は、自らの生産物の価値が最大になるように経済活動を行っている。だが、中立な観察者による道徳的な判断のもとでの行為が前提とされているため、社会の安定や秩序は維持されるのである。そして、そのような人々による利己的な経済活動は、「見えざる手」に導かれて意図せずして社会の利益を促進することがあるという。このようなスミスの経済主体のモデルは、スペンサーの体系のなかに見出すことができたのであり、経済的自由を主張するマーシャルの経済

成長理論で想定される経済主体モデルに対しては、少なからぬ影響を及ぼしていると考えられる。

したがって、社会的な組織の漸進的な発達には、自己犠牲を進んで行う人々やその家族によって達成される。彼らは、家族愛にもとづいて家族の将来のために貯蓄を行う。そして、このような道徳的な行為や感情は、マーシャル経済学では共感から生じるものと把握されている。さらに、教育が将来を実感する能力を人々に獲得させることによって、世代を経るごとに人々の共感する心が浸透していくのである。しかし、経済の進歩や発展は、もちろん労働者階級のみによって達成されるわけではない。そこで次項では、ビジネスマンに対する教育と共感の関係について考察する。

(2) ビジネスマンに対する教育と共感の概念

マーシャルは、教育の充実を前提にした経済社会の進歩を実現するためには、生産技術を利用する労働者の側の問題だけでなく、生産技術を所有するビジネスマンや経営者の側の人間本性の向上もまた重要であることを認識していた。彼はビジネスマンや経営者にとって仕事場が一種の学校であると考えていた。例えば、「地質学の徹底的な研究をしたことのある炭坑経営者にとって、鉱山の堅坑や坑道は一種の科学博物館であり、そして実験場である。彼の精神は彼の仕事とともに成長し、彼は世界の知識の量を増大させるかもしれない」(Marshall 1923, p.821 訳[二]324 頁)という。ところが、このような知的探究心に富むビジネスマンや経営者を育成するためには、三つの能力が獲得されねばならないのである。マーシャルは次のように指摘している。

知覚力(perception)は幼年時代に訓練できる。
想像力(imagination)の源泉は青年時代の初期に属している。…青年時代が過ぎて成年時代に入るまでは、推理力(reasoning)は複雑な問題にお

21) 橋本(1990)は、マーシャルのこのような議論について、「マーシャルは、…最適者生存法則の人間社会への無条件的適用を拒否している」(橋本 1990, 159 頁)といい、また「経済組織に関する『ニュートン主義』を批判するとともに、『社会ダーウィニズム』と後に呼ばれるようになった考え方にも与していないのは明らかである」(ibid., 158 頁)と述べている。

いて遠くまで進めていくことができない。ビジネスマンは三つの能力をすべて必要とする。特に、彼は、明瞭であるような原因の遠く隔たった不可視の効果や、目に見える効果の隠れた原因を追跡するために想像力を必要とする。

(Marshall 1923 p.823 訳[二]326 頁)

マーシャルは、労働者階級の人々に対して「将来を明瞭に実感する能力」の獲得を求めたが、ビジネスマンに対しても想像力の必要性を説いている。ところが、マーシャルは、これら三つの能力以上に重要な能力がビジネスマンには必要であるというのである。それこそが「共感」である。なぜなら、「共感とは、…人間本性のすべてに浸透する唯一の堅実で強力な力である」(ibid., p.326 訳[二]188 頁)からである。さらに、彼は次の点を強調する。

共感とは、現代の技術が「ほぼ人間のように考える」ことを教えたもっとも強力な機械と人間とを、架橋不能な隔たりによって分けている。

(Marshall 1923 p.823 訳[二]326 頁)

すなわち、共感が人間固有の特性であるからこそ、マーシャルは共感を道徳的諸感情の源泉として位置づけるのである²²⁾。それでは、共感の能力はどのようにして形成されるのであろうか。労働者階級と同様に、将来を実感する能力の獲得を目的とした家庭内教育や学校教育を通じて形成されるのであろうか。

マーシャルは、ビジネスマンたちに共感という道徳的能力を形成・増大させるためには、寮などの寄宿舎で営まれる学生同士による集団生活が重要であると考えた²³⁾。なぜなら、「学生間の共感とは、常に弱い側ないしは弱いと思われる

側に向けられる」ため、「そのような[共感を発達させるような]訓練を持たない雇用者よりも、容易に被用者の心を読むことができる」からである(Marshall 1923, p.823 訳[二]326 頁)。つまり、ビジネスマンや経営者が労働者の立場に立って物事を考えることができるのなら、彼らの間にある労働問題をうまく扱うことができるようになると、マーシャルは考えたのである。このように彼は、学生時代の共同生活を通じて、ビジネスマンや経営者に「想像上の立場の交換」を行う道徳的能力の獲得を求めたのである。

藤井(1995, 115 頁)によれば、19 世紀後半の学校教育論において扱われる共感の概念は、アダム・スミスの共感の概念を基礎にしているという。それはまた、イギリスにおける学校教育の前提であったと述べている。既に見てきたように、マーシャルは、スペンサーの共感の概念——間接的に、スミスの『道徳感情論』における共感の概念——の影響を受けていた。このようなことから、マーシャルの指摘する共感の概念は、スミスの共感の概念を源泉として理解することができる。

ところで Whitaker(1990, p.217 訳 265 頁)によれば、1922 年 8 月に、マーシャルは自らの

22) ここで指摘される共感が心理学研究で扱われたものと同様であるとするならば、「機械論」における道徳的行為に関する分析は、擬人化された機械ではなく、現実の人間を対象にしていたと言えることができるのである。

23) 藤井(1995)によれば、「もともと、近代市民社会の一員として要求される行動様式の育成という課題は、十八世紀半ばの家庭教育論においてこそ重視されていた。だが、十八世紀末に、互いに内面を観察しようという『共感』関係の育成が目指され、他人との間の感情を通して行動様式を育成することの重要さが明瞭となる中で、その課題は、社会の模型としての学校で果たされるべきことが主張されるようになる」(藤井 1995, 114-115 頁)という。さらに、「十九世紀後半の教師養成を担った者たちによる『共感』と『競争心』の理論は、A.スミスの『道徳感情論』第六版(一七九〇年)において示された理論と重なるものである」(ibid., 108 頁)とし、「十九世紀後半の教師養成の担い手たちはスミスの『競争心』の理論に立つことによって、…『共感』の概念と…『競争心』とを統合する理論を明確にできた」(ibid., 109 頁)と述べる。

ノートへ、経済学は「経済騎士道の社会的可能性」(1907)において扱われた論点に回帰する必要がある、ということを書いたという。この論文は、1907年の *Economic Journal* 誌に発表されたものであり、その中核的概念は同年に出版された『原理』の第五版に挿入されて以来、最終版(第八版)まで削除されることはなかった。それでは、「経済騎士道の社会的可能性」の論点とはどのようなものなのだろうか。マーシャルは次のように述べている。

私たちが、このような経済騎士道を教育できるならば、この国は私的企業の下で栄えることができるだろう。…世界のすべての貿易がほとんど空中で行われるようになると信じる人々は、鉄道の橋を破壊することをわれわれにすすめる前に、風に逆らって重い積荷を運ぶことができる少数の航空機を作って見せるべきである。同じような理由から、絶えることのない自由な創意心が進歩のために必要である産業に、集産主義的管理を不必要に導入することによって創造的な企業をさらに狭める前に、集産主義の困難をはるかに注意深く研究すべきである。

(Marshall 1907, p.346 訳 159-160 頁)

このように、マーシャルは経済騎士道の精神にもとづく、自由主義経済による国家の繁栄を心に描いていたのである。より具体的には、Matthews(1990, p.41 訳 46 頁)の指摘するように、マーシャルは政府のもつ影響力と同じ程度の影響力をビジネスマンや経営者、労働者のリーダーたちに与えようとしていたのである。このような自由主義的な経済思想は、スペンサーのそれと類似している。前節において指摘したように、スペンサーは、適者生存の法則によって人々の共感する心が強化されることを指摘し、各個人が最大満足を達成するために自由に行動すべきであると考えていた。そして、スペンサーは共感の概念について述べるにあたって、スミスの『道徳感情論』における共感の原理

を参考にしていた。心理学研究だけでなく経済学においてもスペンサーの影響を受けていたマーシャルは、適者生存の法則のもとで存続するために、経済騎士道の精神に則った自由な経済活動が行われるべきであると考えていたのである。なぜなら、絶えざる自由な創意心を具現することのできる自由な経済活動こそ、進歩の源泉だからである。もちろん、そのような私的企業のビジネスマンや経営者の行動は共感に基づいていなければならない。マーシャルの共感の概念がスペンサーを介したかたちでスミスから影響を受けていることは、すでに指摘したとおりである。このようにして、ビジネスマンは経済騎士道の精神にもとづいて行動せねばならず、さらに集産主義による管理を避けなければならないとマーシャルは考えたのである。

以上より、進歩の源泉は共感や経済騎士道の精神にもとづいた私的企業による自由な経済活動にあるという論理こそ、「経済騎士道の社会的可能性」(1907)においてマーシャルが最も主張したかった論点であると考えられる。したがって、理想的な経済進歩を実現するためには、ビジネスマンたちは、学生時代の共同生活を通じて騎士道精神の源泉である共感という道徳的能力を獲得する必要がある。そして、マーシャルは「最終的に人間性が騎士道にしっかりと根づくこと」(ibid., p.346 訳 159 頁)が重要であると考えていたのである。

5. むすび

本稿では、マーシャルの心理学研究と経済学の全体を通じて、それらの中核的概念が共感にあることを論証してきた。さらに、マーシャル経済学において共感は、教育によって促進される、あらゆる行動や諸感情の源泉となる道徳的能力であった。マーシャルは、経済進歩を達成するためには、労働者階級およびビジネスマンによる想像力の働きが重要であることを指摘した。だが、その想像力を十分に発揮させるため

にも共感する心が必要であると主張したのである。

マーシャルは第一心理学研究論文「節約の原則」のなかで、あらゆる精神現象が共感から生じているというスペンサーの議論を評価していた。さらに、スペンサーは、『社会静学』において、スミスの『道徳感情論』において展開されている同胞感情としての共感を参考に使っていた。ところが、スペンサーは、必ずしもスミスの議論に完全に従ったわけではなかった。スペンサーは、正義を含めて、あらゆる道徳的な感情が共感から生じると把握していたのである。彼はこのような同胞感情としての共感の概念を人々の行動原理の根本に基礎づけるために、家庭における父親の教育を重視した。そこでは、命令－服従理論を前提にした教育が重要であるという指摘がなされた。なぜなら、利己的な子供には他の子供たちへの同胞感情を一度生じさせるだけで、彼あるいは彼女が利己的ではなくなるからである。スペンサーは、早い段階で社会的悪を生じさせる非共感的な性質を変質させなければならないと考えていたのである。このようなスペンサーの見解は、社会の安定や秩序が、その社会を構成する一人一人の人間の道徳的諸感情に依存しているという認識に基づいている。すなわち、共感という道徳的能力は、適者生存の法則のもとで存続する人間の必要条件なのである。マーシャルもまた、「機械論」の最後において共感の概念と進化の概念の関係について指摘したのだが、その具体的考察は『原理』に至るまで展開していなかった。

マーシャルはまた、心理学研究において、スミスに代表されるスコットランド学派による自我の客観的な分析の欠落を克服する必要性を説いた。そして、「機械論」において人間の精神現象と行為の関係を連合主義の説明原理を用いて分析した。特に、「機械論」の後半では、人間の道徳的行為の源泉が共感の原理にあることが指摘され、さらに共感がどのような過程を経て自己犠牲の行為に結実するのかが明らかにされ

た。『産業と商業』において示されていたように、共感とは人間と機械を明確に分断する為、「機械論」における道徳行為に関する分析は、実際の人間の複雑な精神現象を対象にしていたと考えられる。

経済学研究においてマーシャルは、一方で、労働者階級の人々が教育によって「将来を明瞭に実感する能力」(Marshall 1961, p.562 訳[四] 85 頁)を獲得することを求めていた。貯蓄は、家族愛として表れる「将来を実感する能力」によって動機づけられるものだからである。マーシャルは、このような貯蓄を動機づけている家族愛を共感として把握したのである。「経済進歩は家族愛に依存している」(Marshall and Marshall 1881, p.39 訳 47-48 頁)という言葉からも明らかなように、共感とは経済や社会の進歩と密接に関係づけられている。この点は「機械論」における議論と連続性を有している。すなわち、共感とは、自然法則的な生存競争のなかで存続する種族を構成する人々の行動の源泉であると考えられていた。さらに、『原理』では、共感が人々の行動原理に採用されることによって、家族愛にもとづく自己犠牲が種族愛へと広がる。最終的にそのような種族が生存競争の勝利に導かれることから、そのような社会的組織による経済活動が経済進歩をもたらすことが指摘されたのである。この意味において、マーシャルの共感の概念と進化の概念の関係は、スペンサーによるそれらの論理と類似していると考えられる。つまり、スペンサーの議論を参考にして、マーシャルが適者生存の法則と共感の関係について論じていることから、マーシャルの共感の概念は、スペンサーを介したかたちでスミスの共感の概念から影響を受けていたと考えることができる。

他方で、マーシャルは、ビジネスマンにとって共感を最も基礎的な能力であると位置づけていた。共感とは、知覚力、想像力、推理力の三つの能力よりも重要な能力であった。ビジネスマンにおける共感とは、寄宿舎などの学生同士の共

同生活を通じて養われる。共感の心は、常に弱いものの立場に働く傾向があるため、マーシャルは、その能力を獲得した学生たちがビジネスマンに成長した際に、立場の弱い労働者の側に立って労働問題を考えることができるようになると思ったのである。したがって、このようなマーシャルの共感とは、「想像上の立場の交換」を意味するものであり、さらに当時のイギリスの教育制度からみても、スミスの共感の概念に基礎づけられたものである。さらに、経済騎士道の精神は、経済進歩をより堅実なものとして導くための必要条件とされていた。スペンサーは、国家による干渉なしに、共感にもとづく各個人の自由な活動によって幸福の実現を指摘していたが、マーシャルは経済騎士道の精神が人々に根付いた場合に、私的企業の自由な経済活動によって国家の繁栄を達成できると考えていた。もちろん、経済騎士道の精神は公共的な精神であることから、共感によって根拠づけられていることは明らかである。

このように、マーシャルの共感の概念は、彼の心理学研究と経済学研究の全体を通じて中核的な概念として位置付けられている。殊に、教育との関係で扱われる場合には、彼の経済成長理論が前提とする人間本性の向上に関する議論をより明確なものにする。それゆえ、マーシャルの想定する経済主体は、現代経済学の理論分析において想定されている代表的個人ではなく、共感に基礎づけられた柔軟な人間本性を有する主体であることは明らかである。ところが、マーシャルは晩年に、当時の科学的水準において、経済学が人間本性の変化を研究することは不可能であると指摘しており(Marshall 1923, p.676 訳[一]235 頁)、さらに「再び生涯を送らなければならないのなら、わたしは生涯を心理学に捧げるだろう。経済学は理想との関わりがあまりにも乏しい」(Keynes[1933]1972, p.200 訳 164 頁)と回想している。本稿でも指摘したように、マーシャルの初期心理学研究の目的は、人間の能力の発達する可能性を探索するこ

とであった(Keynes[1933]1972, p.171 訳 134 頁)。このように、マーシャルは一貫して人間本性の変化を扱うことを自らの学問的な理想としていたのであり、この論点はマーシャルの経済成長理論の意義を検討するうえで重要であるが、この点に関する詳述は別稿に委ねたい。

参考文献 ※引用文の訳は適宜変更した。

- 阿部秀二郎 2000, 「市場理論の前提——ジェヴォンズ理論の考察から——」『資本主義の原理』所収, 星野富一, 奥山忠信, 石橋貞男編, 昭和堂, 59-71 頁。
- Bentham, J. [1789]1996. *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*. In *The Collected Works of Jeremy Bentham*. Edited by J.H. Burns and H.L. Hart. Oxford: Clarendon Press. 山下重一訳「道徳および立法の諸原理序説」『世界の名著 38 ベンサム・J.S. ミル』所収, 関嘉彦編, 中央公論社, 69-210 頁。1967 年。
- Cook, S. 2004. Missing Links in Marshall's Early Thoughts on Education. *European Journal History of Economic Thought* 11 (4) :555-578.
- 2006a. Economics and Psychology. In *The Elgar Companion to Alfred Marshall*, edited by T. Raffaelli. G. Becattini. and M. Dardi. Cheltenham and Northampton: Edward Elgar.190-196.
- 2006b. Education. In *The Elgar Companion to Alfred Marshall*, edited by T. Raffaelli. G. Becattini. and M. Dardi. Cheltenham and Northampton: Edward Elgar. 522-527.
- 藤井賢治 2007, 「知識・組織・潜在能力——マーシャル」『市場社会とは何か』所収, 平井俊顕編, 上智大学出版, 67-89 頁。
- 藤井真理 1995, 「十九世紀イギリス学校教育における「共感」概念の系譜」『一橋論叢』114 (2) 103-318 頁。
- Groenewegen, P. 1994. Alfred Marshall —— Women and Economic Development: Labour, Family and Race. In *Feminism and Political Economy in Victorian England*. edited by P. Groenewegen, Alder-

- shot, Brookfield/ Edward Elgar. 79-109.
- 1995. *A Soaring Eagle: Alfred Marshall 1842-1924*. Brookfield: Edward Elgar Publisher.
- 2003. Alfred Marshall on Homo (Economicus): Evolution Versus Utilitarianism? In *Evolutionary Economics and Human Nature*, edited by J. Laurent. Cheltenham: Edward Elgar. 114-133.
- 2007. Alfred Marshall's Use of Adam Smith: Coming to Grips with an Aspect of Alfred Marshall's Citation Practice. *The European Journal of the History of Economic Thought*. 14 (2): 273-289.
- Guillebaud, C.W. 1961. *Alfred Marshall Principles of Economics*. 9th (Variorum) edition Vol.2, NOTES. London: Macmillan.
- Hamilton, W. [1852] 2001. *Discussions on Philosophy and Literature, Education and University Reform*. In *University Reform in Great Britain (1) Oxford and Cambridge*. Volume. 7. edited by Yoshihito Yasuhara. Bristol: Thoemmes Press.
- 橋本昭一 1990, 「産業組織論」『マーシャル経済学』所収, 橋本昭一編, ミネルヴァ書房, 152-178 頁。
- 1997, 「初期マーシャル研究の現在」『関西大学経済学論集』46 (5) 553-594 頁。
- 早坂忠 1971, 「マーシャル経済学形成過程についての若干の覚書」『社会科学紀要』20, 21 115-183 頁。
- Hayek, F.A. [1963] 1967. The Legal and Political Philosophy of David Hume. In *Studies in Philosophy, Politics and Economic*. Chicago: The University of Chicago Press. 106-121. 田中真晴・田中秀夫編訳「デイヴィッド・ヒュームの法哲学と政治哲学」『市場・知識・自由』所収, ミネルヴァ書房, 134-164 頁, 1986 年。
- [1967] 1978. Dr Bernard Mandeville. In *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*. London: Routledge & Kegan Paul London and Henley. 249-266. 田中真晴・田中秀夫編訳「医学博士バーナード・マンデヴィル」『市場・知識・自由』所収, ミネルヴァ書房, 100-133 頁, 1986 年。
- 1979. *Law, Legislation and Liberty, Volume 3 The Political Order of a Free People*. Chicago: The University of Chicago. 渡部茂訳『ハイエク全集 10 法と立法と自由Ⅲ自由人の政治的秩序』, 春秋社, 1983 年。
- Hume, D. [1740] 1964. *A Treatise of Human Nature and Dialogues Concerning Natural Religion*. In *David Hume The Philosophical Works*. Vol.1, 2. Aalen: Scientia Verlag Aalen. 大概春彦訳『人性論』岩波書店, 1948 年。
- 今田恵 1962, 『心理学史』岩波書店。
- 稲垣良典 1990, 「『オッカムの剃刀』——中世後期の精神的風土——」『抽象と直観』所収, 創文社, 71-99 頁。
- 磯川暁 1988, 「マーシャルの進化論的倫理学の研究——ハーバート・スペンサーとの関係——」『商経学叢』35 (2) 113-135 頁。
- 1990, 「進化論的経済学の範囲——未完の体系」『マーシャル経済学』所収, 橋本昭一編, ミネルヴァ書房, 52-95 頁。
- 1996, 「マーシャルの進化論研究の発端——哲学から心理学へ」『経済学史学会年報』, 第 34 号 14-27 頁。
- 岩下伸朗 2008, 『マーシャル経済学研究』ナカニシヤ出版。
- Jevons, W.S. [1911] 2001. *The Theory of Political Economy*. 4th edition. In *The Palgrave Archive Edition of The Writings on Economics of W.S. Jevons*. Volume 3. New York: Palgrave Publishers Ltd. 小泉信三・寺尾琢磨・永田清訳「経済学の理論」『小泉信三全集 24』所収, 文藝春秋, 133-544 頁, 1969。
- 門脇覚, 2007. 「初期マーシャルの認識論と思想形成」『功利主義と社会改革の諸思想』所収, 音無通宏編著, 中央大学出版部, 487-517 頁。
- Keynes, J.M. [1933] 1972. *Essays in Biography*. In *The Collected Writings of John Maynard Keynes*. Vol.X. London and New York: Macmillan and Cambridge University Press. 熊谷尚夫・大野忠男訳『人物評伝』岩波書店, 1959。
- 近藤真司 1989, 「マーシャルの労働者論」『竜谷経済経営論集』28 (4) 109-128 頁。

- 1990, 『『生活基準』の経済学』『マーシャル経済学』所収, 橋本昭一編, ミネルヴァ書房, 96-127 頁。
- 1993, 「マーシャルと J.S.ミル」『マーシャルと同時代の経済学』所収, 井上琢智, 坂口正志編, ミネルヴァ書房, 52-82 頁。
- 1995, 「経済進歩における労働者の役割」『龍谷大学経済学論集』34(4) 91-117 頁。
- 1997, 『マーシャルの「生活基準」の経済学』大阪府立大学経済研究叢書, 第 85 冊。
- Marshall, A.1867a. The Law of Parsimony. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Archival Supplement 4: 95-103.
- 1867b. Ferrier's Proposition One. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Archival Supplement 4: 104-115.
- 1868a. Ye Machine. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Archival Supplement 4: 116-132.
- 1868b. The Duty of Logician or the System-Maker to the Metaphysician and to the Practical Man of Science. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Archival Supplement 4: 133-148.
- 1872. Mr. Jevons' Theory of Political Economy. In *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A.C. Pigou. London: Macmillan. 永澤越郎訳「ジェヴォンズ氏の『経済理論』」『マーシャル経済論文集』所収, 岩波ブックセンター信山社, 316-325 頁, 1991 年。
- 1873. The Future of Working Classes. In *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A.C. Pigou. London: Macmillan. 永澤越郎訳「労働者階級の将来」『マーシャル経済論文集』所収, 岩波ブックセンター信山社, 193-21 頁, 1991 年。
- 1898. Distribution and Exchange. *The Economic Journal*, 8(29): 37-59.
- 1890. *Principles of Economics*. 1st edition. London: Macmillan.
- 1907. Social Possibilities of Economic Chivalry. In *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A.C. Pigou. London: Macmillan. 永澤越郎訳「経済騎士道の社会的可能性」『マーシャル経済論文集』所収, 岩波ブックセンター信山社, 128-160 頁, 1991 年。
- 1920. *Principles of Economics*. 8th edition. London: Macmillan. 永澤越郎訳『経済学原理』岩波ブックセンター信山社, 1985 年。
- 1923. *Industry and Trade*. 4th Edition. London: Macmillan. 永澤越郎訳『産業と商業』岩波ブックセンター信山社, 1986 年。
- 1961. *Principles of Economics*. 9th (Variorum) edition. London: Macmillan. 永澤越郎訳『経済学原理』岩波ブックセンター信山社, 1985 年。
- Marshall, A. and Marshall, M. P.1881. *The Economics of Industry*, 2nd Edition. London: Macmillan. 橋本昭一訳『産業経済学』関西大学出版部, 1985 年。
- Marshall, M. P. *What I Remember*, Cambridge: the Cambridge University Press.
- 松山直樹 2008, 「A.マーシャルにおける初期心理学研究と経済学の連関」『ディスカッション・ペーパー』(北海道大学), シリーズ B, No.2008-74。
- Matthews, R.C.O. 1990. Marshall and the Labour Market. In *Centenary Essays on Alfred Marshall*. edited by J.K. Whitaker. UK: Cambridge University Press. 14-43. 近藤真司訳「マーシャルと労働市場」『マーシャル経済学の体系』, 橋本昭一監訳, ミネルヴァ書房, 17-54 頁。
- 日本イギリス哲学会 2007, 『イギリス哲学・思想事典』研究社。
- 西岡幹雄 1990, 「マーシャル経済学の生成」『マーシャル経済学』所収, 橋本昭一編著, ミネルヴァ書房, 20-51 頁。
- 1993, 「心理学から経済学へ——マーシャルの *Ye Machine* の性格をめぐる——」『経済学論叢』44(4) 68-91 頁。
- 1996, 「マーシャルの初期価格学説」『経済学論叢』48(1) 50-103 頁。
- 1997, 『マーシャル研究』見洋書房。
- 2003, 「産業の特定地域への集中と経済集積」『経済学論叢』54(4) 67-97 頁。
- 西岡幹雄・近藤真司 2002, 『ヴィクトリア時代の経済像』萌書房。

- 西沢保 2007, 『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店。
- 小沼宗一 2007, 「マーシャル経済思想と教育」『東北学院大学経済学論集』164, 143-158 頁。
- 斧田好雄 1998, 「マーシャルと大学教育」『経済学論究』52(1) 1-21 頁。
- Pigou, A.C. 1925. *Memorials of Alfred Marshall*. London: Macmillan.
- Pujol, M.A. 1992. Gender and Class in Marshall's *Principles of Economics*. In *Feminism and Anti-feminism in Early Economic Thought*. Cheltenham, Massachusetts: Edward Elgar. 122-143.
- Raffaelli, T. 1994. Marshall's Analysis of The Human Mind. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*, Archival Supplement 4. 57-93.
- 2003. *Marshall's Evolutionary Economics*. New York: Routledge.
- 2006a. Character and Capabilities. In *The Elgar Companion to Alfred Marshall*, edited by T. Raffaelli, G. Becattini, and M. Dardi. Cheltenham and Northampton: Edward Elgar. 488-494.
- 2006b. Ye Machine. In *The Elgar Companion to Alfred Marshall*, edited by T. Raffaelli, G. Becattini, and M. Dardi. Cheltenham and Northampton: Edward Elgar. 26-30.
- 2007. Marshall's Metaphors in Method. *Journal of the History of Economic Thought* 29(2): 135-151.
- Raffaelli, T., Biagini, E and McWilliams Tullberg, R. 1995. *Alfred Marshall's Lectures to Woman*. Aldershot and Brookfield: Edward Elgar.
- 坂口正志 1990, 「有機的成長論」『マーシャル経済学』所収, 橋本昭一編, ミネルヴァ書房, 214-250 頁。
- Schabas, M. 2005. *The Natural Origins of Economics*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Sidgwick, A. and Sidgwick, E.M. [1906] 1996. *Henry Sidgwick A Memoir* Bristol: Thoemmes Press.
- 白井孝昌, 1993. 「ケインズの描いた A. マーシャル像」『経済学の射程』所収, ミネルヴァ書房, 153-179 頁。
- Smith, A. [1776] 1976. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. In *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith II*. Vol.1, 2. Oxford: Clarendon Press. 大河内一男監訳『国富論』中公文庫, 1978 年。
- [1790] 1976. *The Theory of Moral Sentiments*. In *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith I*. Oxford: Clarendon Press. 水田洋訳『道徳感情論』岩波文庫, 2003 年。
- Spencer, H. [1857] 1911. Progress: Its Law and Cause In *Essays on Education (Everyman's Library)*. London / New York: Aldine Press. 153-197. 清水禮子訳「進歩について——その法則と原因」『世界の名著 36 コント・スベンサー』所収, 清水幾太郎編, 中央公論社, 399-442 頁, 1970 年。
- [1859] 1911. What Knowledge is of Most Worth? In *Essays on Education (Everyman's Library)*. London / New York: Aldine Press. 1-44. 清水禮子訳「知識の価値——教育論第一部」『世界の名著 36 コント・スベンサー』所収, 清水幾太郎編, 中央公論社, 445-486 頁, 1970 年。
- 1868. *Social Statics; or The conditions essential to human happiness specified, and The first of them developed*. London: Williams and Norgate.
- Whitaker, J.K. 1975. *The Early Economic Writings of Alfred Marshall*. Vol.1, 2. The Macmillan Press LTD: London.
- 1990. What Happened to the Second Volume of the Principles?. *Centenary Essays on Alfred Marshall*. edited by J.K. Whitaker. UK: Cambridge University Press. 193-222. 西岡幹雄訳『『経済学原理』の第二巻はどうなったのか?』『マーシャル経済学の体系』所収, ミネルヴァ書房, 241-277 頁, 1997 年。
- 1996. *The Correspondence of Alfred Marshall, Economist*. Vol.1,2,3. New York: Cambridge University Press.